

ブラームス少年は、港の酒場でピアノを弾いたか？

北ドイツのハンブルクに、レーパーバーンという歓楽街がある。港の魚市場のあたりから少し北に歩くとその街に着くのだが、途中の通りには、夕暮れ時ともなると妖しげな女性たちが立っていて、タバコを吸いながら道行く男や仲間の女と話している。一帯はネオンがきらめき、男性向けの直裁な表示をした店が連なっている。この界限とブラームスは因縁が深い。

ブラームスは 1833 年、ハンブルクで生まれ、幼少期をすごした。ブラームスの伝記の多くが、彼の少年時代について、次のようなことを記している。

十三歳のときから、家計を助けるために、酒場や料理店やダンス・ホールなどで、主として船員のために演奏するようになった。また、そうしたところから呼び出しがあれば、夜中でもすぐにでかけなければならなかった。それにしても、報酬はごくわずかであり、煙草の煙がたちこめ、酒とほこりで汚れた空気の中で、何時間もダンスのための音楽を奏し続けることは、苦痛だった。(門馬直美著『ブラームス』)

この引用文は、中学校の図書室にも置いてあるような本からなので、抑制した表現になっているが、伝記によっては、ブラームスが明け方までピアノを弾いた酒場は売春宿を兼ねていたこと、売春婦たちは客の船員たちの気を引くために、年齢より幼く見えるブラームスをおもちゃにしたこと、そして、報酬はわずかだったが、酒は飲み放題だったので、ブラームスはふらふらになって木々をつたいながら帰宅することもあったことなどが書かれている。そして、少年時代のこの強烈で暗い経験が後々までトラウマとなり、女嫌い、人嫌い、頑固、無愛想といった印象を与えるブラームスの人格を形成したのだと解説してある。

ところが、1986 年になって、この伝説は真実ではないと主張する本が出版された。ハンブルク生まれのホフマンが書いた『ヨハネス・ブラームスとハンブルク』である。その後、これに追随する研究者も現れたので、伝説の肯定派と否定派のあいだで論争になった。

ホフマンたちが伝説を否定する理由はこうである。まず、ブラームスは家計を助けるために酒場でピアノを弾いたことになっているが、ブラームス家はそれほど貧しくなかった。父親は楽団のコントラバス奏者で、それなりに収入があった。家にはコントラバスのほかにも様々な楽器があり、それらを購入する余裕があった。子どもたちを学校に通わせ、さらにブラームスには優秀な音楽教師をつけることがで

きた。また、ブラームスが十三歳頃住んでいたところは、問題の酒場兼売春宿があったと推定される場所（現在のレーパーバーンの少し南）から歩いて四十分以上かかるので少年には遠すぎる。さらに、ブラームスが音楽の先生コッセルに書いた手紙が残されているが、内容も字体もしっかりしており、とても明け方まで酒場にいた睡眠不足の少年が書いた手紙には見えない。そして、当時の法律は未成年が酒場で働くこと禁じていたはずだ、といったことである。

一方、肯定派は、否定派が挙げた理由はどれも状況証拠にすぎないと主張する。楽器を購入したということは、家計に余裕があるという証拠より、むしろ出費がかさみ息子を働かせてでも収入を増やそうとする動機になりえる。徒歩四十分の距離は当時の少年にとってそれほど遠くないだろうし、酒場から呼び出しがあったのは毎晩ではなかっただろうから、きちんとした手紙を書ける日もあったはずだ。そして、歓楽街で法律が守られないのは古今東西共通である。

今のところ、論争は肯定派の方に分がある。それは、少年時代に酒場でピアノを弾いたことを証言したのがブラームス本人であるということを否定派が否定しきれないからだ。ブラームスが嘘を言ったとも思えないし、ブラームスの証言を聞いた人が複数いる。

ハンブルクにはブラームス博物館がある。「ブラームスは少年時代に酒場でピアノを弾いたのか」と私が館員に尋ねたとき、彼女は即座に否定し、「ピアノは弾いたが、酒場ではなく、郊外の小さなレストランで、しかもお父さんと一緒に演奏した」と言って、そのレストランを描いたリトグラフを見せてくれた。

伝説を否定する人々は、ブラームスやハンブルクを心から愛している。だが大丈夫。伝説は少なくともハンブルクを傷つけはしない。1960年代に修行中のビートルズがレーパーバーンで演奏したことは有名である。彼らも連夜、酔客相手に長時間演奏しなければならなかった。しかし、ジョン・レノンは後に「僕たちはリバプールで生まれたが、ハンブルクで育った」と語った。

それにしても、ブラームスの交響曲第1番の崇高さとレーパーバーンの雰囲気は、あまりにもかけ離れている。ブラームスは、まだハンブルクにいた20歳代初めに交響曲の作曲を決意し、それから二十年の年月をかけて完成した。レーパーバーンから交響曲第1番までのとてつもない長い距離を一步一步高みに向かって愚直に歩いていったのだ。

([名古屋大学交響楽団第107回定期演奏会パンフレット](#))